

中尾城・大山出城の構造

矢野 稔 貴*

The structure of Nakao castle and Ohyama castle

Toshiki YANO

要 旨

畿内戦国史研究や畿内の城郭調査の成果を活用して、京都東山に残る城郭を室町幕府が維持した山城という視点から畿内戦国史のなかに位置づけることを目的とした。本稿では、その最初の試みとして、中尾城と大山出城の遺構を縄張り研究の立場から改めて検討した。先行研究では山中越えを重視した山城という評価であったが、京都にいる三好氏との戦闘を強く意識した軍事的な山城であることが明らかになった。

キーワード：中尾城、大山出城、戦国期室町幕府

I はじめに

近年、畿内戦国史に関する研究が大きく進展している（天野2020、木下2017、2018など）。特に、応仁の乱以降、室町幕府は権力を喪失し、諸大名の傀儡にされたというイメージは払拭され、再評価されつつある（山田2020）。一方、城郭研究においても畿内の城郭の網羅的な調査によって（城郭談話会2014-2018、京都府教育委員会2014、2015など）、各府県の特徴が明らかになりつつある（城郭談話会2019）。また、大名の拠点的城郭として位置づけた研究も行われている（天野2015、新谷2015など）。

しかし、室町幕府が維持した東山の山城（図1）を政治史のなかに位置づける研究は十分に行われていない。そこで本稿では、天文18年から19年にかけて足利義晴・義輝が維持した中尾城と、それに付随すると考えられる大山出城を縄張り研究の立場から基礎的な検討を行う。

II 中尾城

中尾城は慈照寺の東側の標高270m付近に築かれた山城である（図2、3）。南北約250m×東西約200mに渡って遺構が広がり、主に4つの曲輪で構成される。

令和2年9月14日受理 *文学研究科文化財史科学専攻博士前期課程 在学生

中尾城の中心に位置する曲輪Ⅰは、曲輪Ⅱに向かって土塁を設け、西側から北側にかけて切岸によって防御を固めている。現在の曲輪Ⅱへの動線は、土塁が切れる西側を迂回するようになっている。しかし、土塁は曲輪Ⅰの南側だけではなく、南東隅から東側の窪地までを防御するように折れていることから、東側の窪地を虎口と推定することができる。虎口から直下の腰曲輪を経て、曲輪Ⅱに接続していたと考えられる。

曲輪西側の窪地に関して、池田誠氏は曲輪Ⅱの南側からのびる通路と接続する枳形であると評価している（池田1989）。しかし、曲輪Ⅱへの動線は前述の通り、曲輪Ⅰの東側の虎口であるため、池田氏の評価を受け入れることはできない。現在、曲輪Ⅰから曲輪Ⅳへの動線が見えないため、この窪地が枳形的な役割を果たし曲輪Ⅳへの動線の起点であった可能性は否定できない。しかし、西斜面は切岸となり通路状の遺構は見られないことから、北斜面の切岸通じて曲輪Ⅳと接続していたと現段階では解釈しておく。これは現在の登山道も同様である。

曲輪Ⅱは南側に堀切が1条あるのみであり、土塁を設ける曲輪Ⅰと比較すると手薄な印象である。しかし、東西の斜面は急峻な切岸となっており、また西斜面の一部を張り出すことで、登山道へのならみを利かせている。

堀切1を越えるとY字に分岐し、東側には曲輪Ⅲ、南側には堀切2が位置する。曲輪Ⅲは中尾城全体の入口となる堀切2を上部から制圧することができる曲輪である。平坦面は手狭であるが、四方は急峻な切岸に囲まれ、高さはないものの幅の広い土塁を南側に設ける。このような幅広い土塁は城内に存在しないため、南側の堀切2を経由する登山道を上部から制圧する極めて軍事的な曲輪であると評価できる。堀切2は二重で、南側のものは京都から続く登山道と一致する堀底道となっている。現状では堀切としては不自然な遺構となっているが、堀切2以南に城郭遺構は見られないことから、北端の堀切3と同様に城域を画する堀切であったと評価できる。

曲輪Ⅰの北側には曲輪Ⅳが位置する。全体的に手狭な曲輪であり、西側の一部には土塁を、北端には堀切3を設けている。現在の登山道と接続する場所に土塁を設けており、当時も大山出城を経由するルートがあり、それを押さえる役割があったのだろう。堀切3以北にも平坦面が広がるが自然地形であるため、堀切3が城域の北端である（村田1981）。なお、平坦な自然地形の北端部は崩落によって崖状になっている。

Ⅲ 大山出城

大山出城は、中尾城から北西に延びる尾根上に位置する城郭である（図2）。中尾城からはやや離れているものの、曲輪Ⅳの土塁に続く登山道と接する位置にあるため、中尾城と密接に関わる城郭であることが想定される。

遺構は約50m四方に広がり、曲輪内部の削平は甘く、一部では播鉢状になっている。北側には高さ約3mの土塁と1mにも満たない土塁によって虎口を形成する。虎口を形成する低い土塁は西端で南側に折れていることから、曲輪西側も土塁があったことが想定できる。また、曲輪東側は大きく崩落しているものの土塁の一部が残っていることから、南側以外の三方を土塁で囲繞する城郭であったと復元できる。

山城の多くは、尾根のピークや山頂などを中心として広がっていることが多い。しかし、大山出城は尾根のピークから外れた北斜面に築かれ、ピークは自然地形のままである。つまり、城域の北側を通る山中越えを強く意識して築かれた山城であると言える。また、中尾城の土塁よりも高い土塁が残存していること、曲輪内部の削平は甘く、居住空間であったと想定しがたいことから、極めて軍事的な出城であると想定できる。

福島克彦氏は、土塁に囲繞された平坦面の存在と石積みから恒久的な利用を指摘している（福島2006）。しかし前述のように、曲輪内部の削平は甘く、居住性が高いとは言い難い。また石積みに関して、崩落面に岩石が露頭していること、曲輪内部にも多数散在していることから、当時の石積みの残欠とするよりも、土砂の流出によって露頭したものと評価すべきである。さらに、石積みの使用によって恒久的な利用を想定しているが、恒久的な利用がされた拠点的城郭のすべてに石垣や石積みを設けたわけではないため、居住性と石積みとの関係性は薄い。よって大山出城は山中越えを睨む、軍事機能を専一にした山城であったと評価できる。

IV 中尾城・大山出城の位置づけ

以上、現在の遺構から中尾城と大山出城を検討した。中尾城は手狭な曲輪が広がるが、城域の端に堀切を設け、曲輪Ⅲの土塁によって防御を固めている。大山出城の曲輪内部の削平は不十分であるが、非常に高い土塁で防御を固めている。つまり、中尾城と大山出城は居住や政治の城郭ではなく、軍事的な城郭であったといえる。

中尾城・大山出城は立地から山中越えとの関係を重視されてきた（笹木2015、京都府教育委員会2015）。しかし、中尾城の堀切3以北には北端に崖地形をもつ自然地形が広がるのみであり、山中越えを直接的に制圧・確保しようという意思は見られない。また、大山出城に関しても北側の切岸はあまりにも急峻で、現状では山中越えと直接的に結びつくとは言い難い。一方で中尾城のメインルートを上部から制圧する曲輪Ⅲの存在を考えると、中尾城は洛中への意識、つまり足利義輝が三好氏との戦闘を強く意識して築いた軍事的な城郭であると評価することができる。ただし大山出城の虎口と土塁から、山中越えに対しても備えていたことは間違いないだろう。

中尾城を扱った先行研究では、「万松院殿穴太記」の記述から鉄砲との関係性を強調することが多い（池田1989など）。確かに「穴太記」は信憑性の高い史料であり（小谷2019）、「鉄砲の用心」が行われた可能性はあるだろう。しかし、「穴太記」の記述が遺構と一致する箇所は少なく、遺構と史料とをむやみに結びつけることは控えるべきである。縄張り研究として、現地表面に残る遺構を丹念に読み取ることが重要であろう。

本稿では、地表面観察によって読み取れる情報から中尾城と大山出城を分析してきた。本稿では当城に関連する文献史料や、義晴・義輝が維持した勝軍山城や霊山城などを扱うことができなかった。これらを今後の課題として、室町幕府が維持した城郭という視点から、京都東山に残る城郭の検討を深めていきたい。

参考文献

- 天野忠幸 2015 「三好・松永氏の山城とその機能」 齋藤慎一編『城館と中世史料』高志書院
———2020 『室町幕府の分裂と畿内近国の胎動』吉川弘文館
- 池田 誠 1989 「將軍足利義晴の中尾城を再検討する」『中世城郭研究』第3号
- 木下昌規編2017 『足利義晴』戎光祥出版
———2018 『足利義輝』戎光祥出版
- 京都府教育委員会 2014 『京都府中世城館跡調査報告書 第3冊 山城編1』
———2015 『京都府中世城館跡調査報告書 第4冊 山城編2』
- 小谷量子 2019 『『穴太記』の成立について』『ヒストリア』第275号
- 笹木康平 2015 「中尾城」仁木宏・福島克彦編『近畿の名城を歩く 滋賀・京都・奈良編』吉川弘文館
- 新谷和之 2015 「観音寺城の成立と展開」齋藤慎一編『城館と中世史料』高志書院
- 城郭談話会編 2014-2018 『近畿の城郭』I-V、戎光祥出版
———2019 『文献・考古・縄張りから探る近畿の城郭』戎光祥出版
- 福島克彦 2006 「洛中洛外の城館と集落」高橋康夫編『中世のなかの「京都」』新人物往来社
- 村田修三 1981 「中世城郭の縄張り」平井聖ほか編『日本城郭大系』別巻1、新人物往来社
- 山田康弘編2020 『戦国期足利將軍研究の最前線』山川出版社

Summary

The purpose of this study is to place the castles in Higashiyama area in context of Kinai Sengoku period from the viewpoint of the Muromachi shogunate castles, based on the results of research on the history of Kinai Sengoku period and the survey of castles in Kinai area. In this paper, as the first attempt, I reviewed the remains of Nakao castle and Ohyama castle from study of ground plan. Previous studies evaluated that the castles put emphasis on Yamanaka pass. However, this examination revealed that the castles were conscious of the battle with Miyoshi clan in Kyoto.

Keywords : Nakao castle , Ohyama castle , Muromachi shogunate during Sengoku period

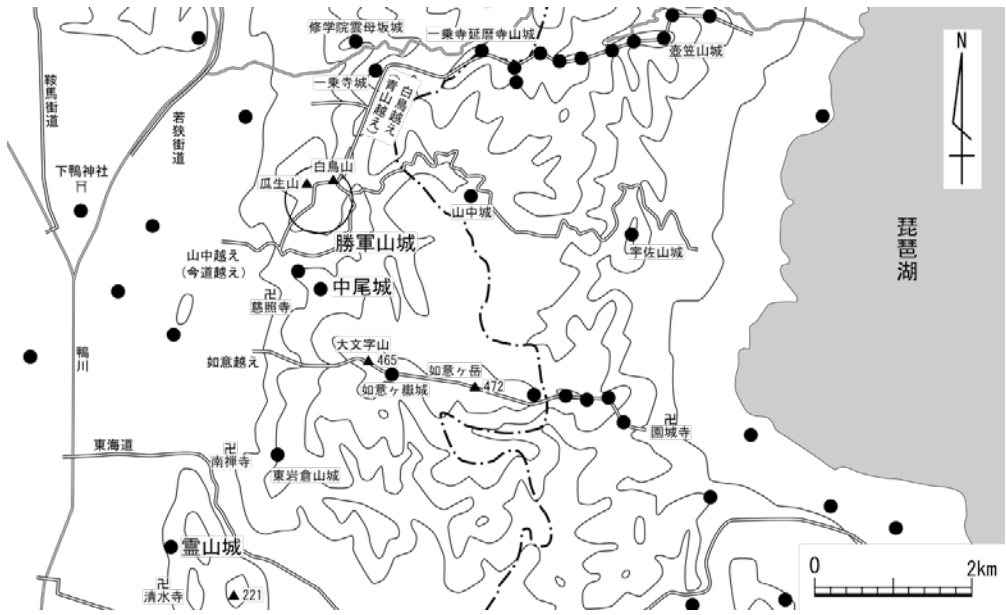


図1 東山の城郭分布図

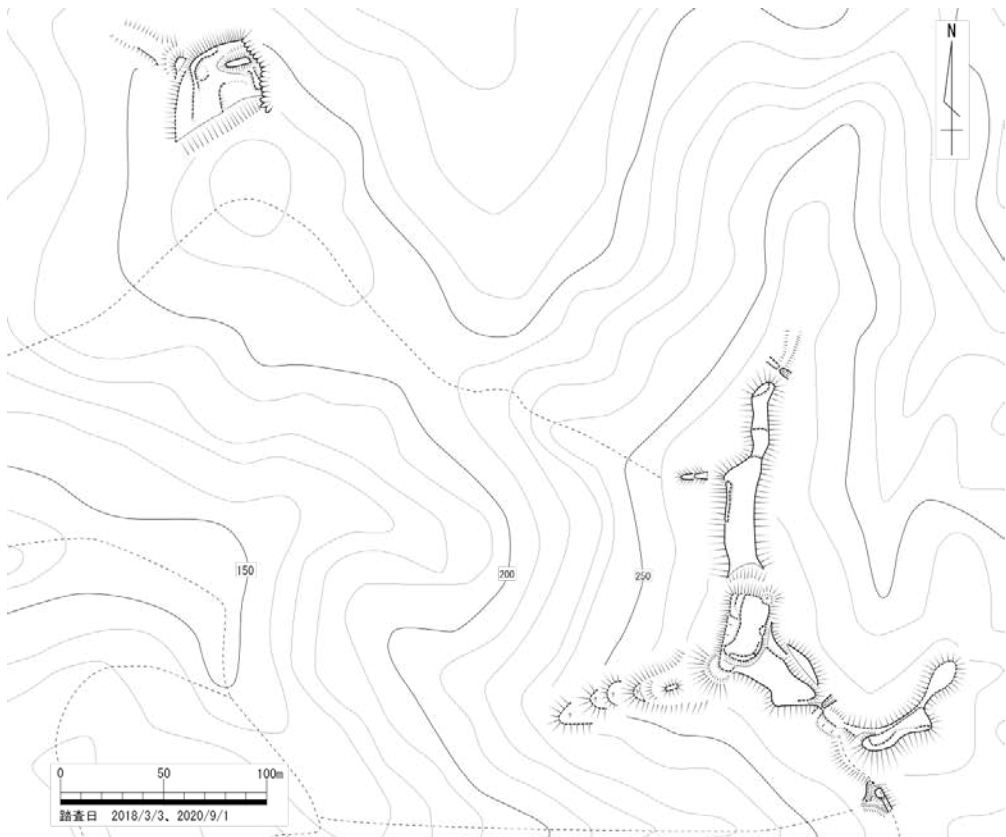


図2 中尾城・大山出城

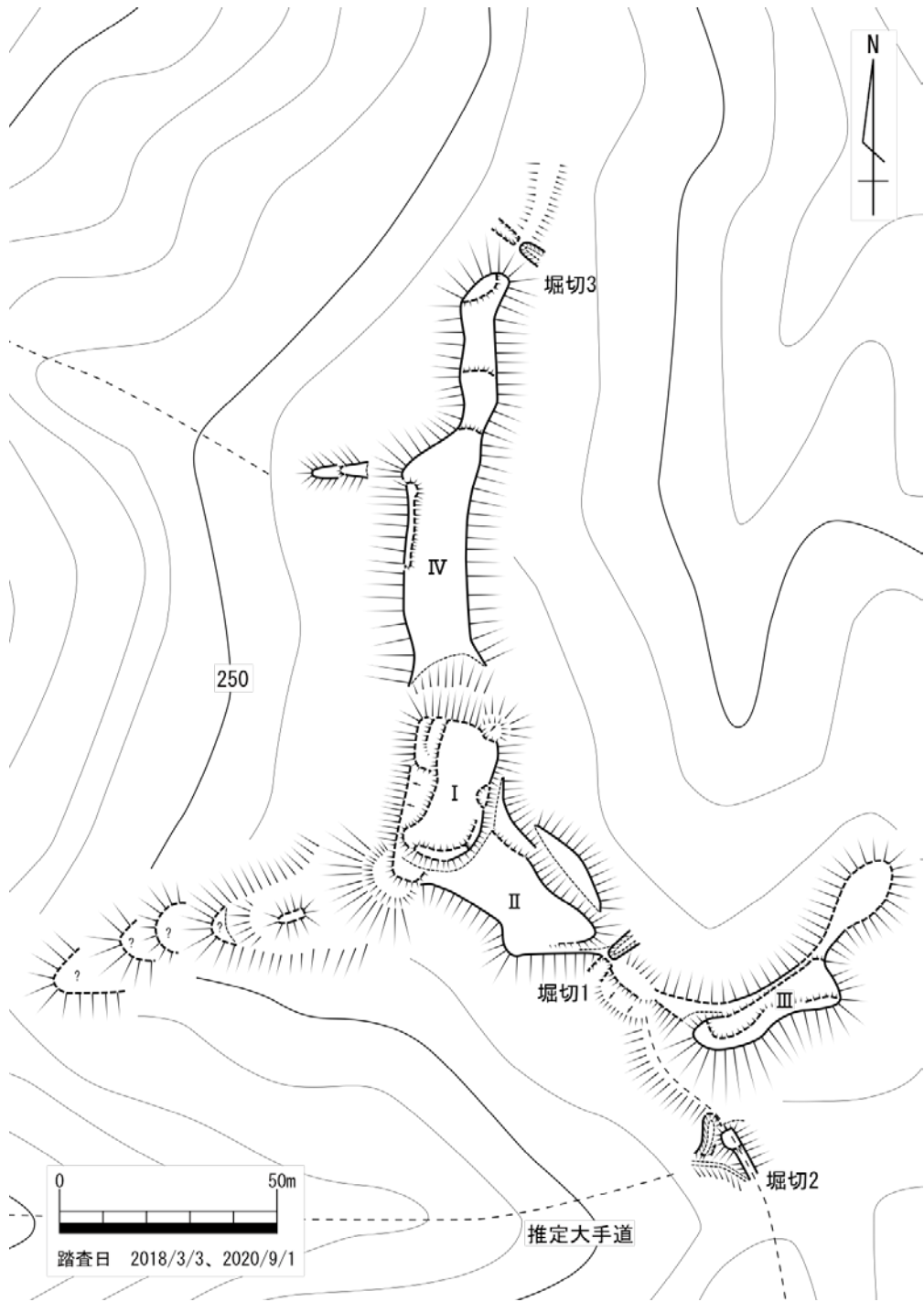


图3 中尾城